

自己評価報告書

令和6年2月13日
九度山町立九度山中学校
校長 阪中 宣之

1	教育目標、教育課程について
<p>教育目標</p> <p>持続可能な未来社会の創り手となるよう、自ら考え行動し、他者とも協働しながら、豊かな人生を切り拓く生徒の育成</p> <p>めざす生徒像</p> <ul style="list-style-type: none">(1) 主体的・対話的で深い学びができる生徒(2) 互いに認め合い、自分も他者も大切にしている生徒(3) たくましい心と体をもつ生徒(4) 夢や希望に向かって努力する生徒(5) 地域や学校に誇りをもつ生徒 <p>これらを学校教育目標と定め、各教科、特別の教科である道徳、特別活動及び総合的な学習の時間の指導、学校行事や部活動等学校教育全般で目標達成に向けて取り組んだ。コロナ禍以降努めてきた行事の精選に引き続き努めることで、授業時間を十分に確保し、計画通り教科指導を実施することができた。また、コロナ禍における活動や行動の制限がなくなり、それぞれの学年で、介護体験・職場体験・地域学習・保育実習等を実施できた。さらに、学校全体では平和学習・人権学習・ボランティア活動等の体験的な学習を通し、地域に生きる人々の誇り、時と場合に応じた礼儀や言動、高齢者に対する敬愛の念、障がい者への理解、平和の大切さ等を学ばせ、豊かな心を持ち、礼儀や正義を重んじる生徒の育成に努めた。生徒評価アンケートでも、ほとんどの生徒が「思いやりや優しさの気持ちを持って生活できた」、「学校で命の大切さや、社会のルールについて学んだ」と回答している。</p> <p>学校教育目標・経営方針については、本年度もPTA総会が紙面決議になる等、直接保護者に説明する機会がほとんどなく、学校だよりや学校ホームページを通してどのような教育活動を計画・実施しているのかを具体的に分かりやすく説明することに努めた。学校評価アンケートでは「学校は教育目標・経営方針を保護者・地域の方にわかりやすく伝えている」・「学校は魅力ある学校づくりに努めている」・「学校は開かれた学校である」等の設問に対して「わからない」と回答する保護者が増加傾向にあったが、本年度は「わからない」がやや減少し、肯定的に捉えてくれている保護者が増加している項目もでてきた。ただ、「わからない」との回答がまだ1割程度の保護者からあがっているため、分かりやすく丁寧な説明に引き続き取り組んでいきたい。</p>	

2	「基礎・基本の定着と主体的・対話的な学び」について
<p>令和2年度より、研究主題を『主体的に学び高め合う生徒の育成』と設定し、全教科・領域において、生徒がアウトプットする授業を目指した。つまり、生徒が学習課題に対して主体的に取り組み、自分の考えを表現し、他者との対話を通して自ら課題に向き合い、さらに深く探究していこうという意欲を向上させるよう授業改善を行うことで、さらに学びの質を高めることを目標とした。また、デジタル教科書やデジタル教材の活用方法についての研究を進めるとともに、指導方法の工夫改善のため、校内研究授業の実践に努めた。前期に行った研究授業で参観者から出た意見等をもとに後期ではさらに改善した研究授業を行い、研究協議を行った。特に、研究協議においては「授業改善のポイント」に焦点化した論議にすることにより教職員の授業力向上に努めた。</p> <p>スクールプランでは達成の指標として、「①県学習到達度調査、全国学力・学習状況調査で全教科の正答率が県平均を上回る ②学校の授業がよくわかる（生徒90%） ③自分の考えを述べるのが得意（生徒70%） ④全教員によるデジタル教材を活用した授業研究を行う」の4点を設定した。</p> <p>①については、学年・教科により+6.7ポイントから-3.6ポイントの正答率であったため、達成できなかった。学年によって正答率に差があるため、補習や習熟度別学習の実施、さらなる授業改善が必要である。②について生徒アンケートでは96.5%が肯定的に回答、③についても生徒アンケートで86.1%が肯定的に回答している。④については、九度山町教育委員会による指定を受けた研究推進にあたり、学習者用デジタル教科書が導入されている数学と英語の2教科に絞った形での校内研究授業となったため、全教員での実施とはいかなかった。</p> <p>数学と英語で導入されたデジタル教科書については、和歌山大学の山田教授によるアドバイスを受け、近隣各校とも連携しながら一層の活用推進を図ることができた。数学と英語以外の教科についても、デジタル教材の積極的な活用を推進したことで、GIGA端末の活用機会がかなり増えた。GIGA端末の有効活用については、今後も研究を進めていく必要がある。</p> <p>家庭学習の習慣化を図るために、「家庭学習の手引き」を作成し、家庭学習の仕方や「家庭学習ノート」の指導を行うとともに、6限の後に「九中タイム」を15分間設け、生徒個々がその日の授業を振り返り、家庭学習の計画を立てる時間とした。どの学年でもこの「九中タイム」を有効に活用し、前向きに取り組むことができた。生徒アンケートでは、「家庭で学習する時間や回数が増えた」と回答する生徒が87.2%となっている。今年度からGIGA端末の家庭への持ち帰りが本格的に始まったことから、ICTを最大限に活用し、さらなる家庭学習の充実を図りたい。</p> <p>数学の授業では、複数人で指導に当たるTT指導に力を入れた。学年によっては習熟度別の学習を行うなど柔軟に対応することで、個に応じた指導に努めた。</p>	

3	「豊かな心とたくましい心身の育成」について
<p>安心して生活できる、落ち着いた環境のなか、生徒は互いによりよい人間関係を形成し、互いの人権を尊重し、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、協力し合う態度を育むことを目標とした。このため、道徳科では、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、議論することを通して、自己の生き方についての考えを深める授業作りを目指した。また、体育科の授業等では生徒が進んで運動に親しみ、運動の楽しさや喜びを味わい、生涯を通じて明るく健康で安全な生活を営むための体力と態度が養えるよう教育活動を行った。</p> <p>スクールプランでは達成の指標として、「①学校へ行くのが楽しい（生徒90%） ②思いやりや優しさの気持ちで生活できた（生徒95%） ③いじめの解消率100% ④先生は相談しやすい（生徒90%） ⑤運動能力調査が県平均を上回る」の5点を設定した。</p> <p>①について、生徒アンケートでは97.7%の生徒が肯定的に回答している。②についても生徒アンケートで96.5%の生徒が肯定的に回答している。③にかかわり、年間3回「いじめアンケート」を実施しており、年間数件のいじめを認知しているが、その全てが解消している。④について、生徒アンケートで肯定的に回答している生徒は93.0%であり、学年により回答にやや差が見られる。普段から生徒との信頼関係の構築を基本とし、教職員相互の情報共有を図り、学校全体として組織的に指導を行っていきたい。⑤については、男子は「全国平均と比較して、ほぼ同じで良い」という総評であり、女子は学年によって「優れている」「もう一歩」という総評であり、ばらつきがみられる。課題を分析し、克服のための取り組みを実施したい。</p> <p>「特別の教科道徳」については、道徳の授業や職場体験学習・ボランティア活動等の体験的な学習を通して、①道徳的諸価値について理解させること。②自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に捉え、人間としての生き方についての考えを深めさせることで、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目指して教育を行った。道徳の授業時間数を確保し、担任だけでなく副担任も授業を受け持つことにより、学校・学年全体で指導計画に基づいた授業を実施することができた。道徳の授業では学習内容を深めるため、対話的な学習形態にすることが多く、本校の研究主題との関連から、より改善された授業を実践することができた。生徒アンケートでは、「生命の尊さ」について、ほとんどの生徒が「学校で命の大切さ」について学んだと回答している。</p> <p>人権教育については、NHKティーチャーズライブラリー『少女たちの戦争～197枚の学級絵日誌』を教材にして、瀬田国民学校5年生が描いた絵日誌からわかる戦時下の国民生活や、戦争が子どもたちの心にもたらした影響について知ることで、人権と戦争、平和について学習した。また、介護体験学習では、「障がいのある状態」を疑似体験することで、高齢者や障がいのある方の身体状況や気持ちの一端を理解するこ</p>	

とができた。さらに、人権講演会ではソプラノ歌手大島久美子さんから「みんな大切な命」をテーマに講演していただき、戦争と平和、命について考える機会となった。

4 「未来の創り手となる生徒の育成」について

自己の良さや可能性を認識し、自分らしい生き方を探る力や、夢や希望を持ち、それを叶えるため、最後まであきらめず努力する生徒の育成を目標とした。そのため、豊かな体験活動（職場体験活動やボランティア活動）を通じて、規範意識や社会性を育成させること、自立のため、自己肯定感・達成意欲・自己効用感を高めることを目指した。また、ふるさと教育により、地域に誇りをもち、地域社会の一員としての自覚を高め、「人や社会とのつながりの中で活躍できる」生徒の育成に取り組んだ。

スクールプランでは達成の指標として、①先生は自分の努力を認めてくれた（生徒90%） ②学校行事に意欲的に取り組んだ（生徒90%） ③社会のルールについて学んだ（生徒95%） ④先生は相談しやすい（生徒90%） ⑤体験学習での生徒の変容（感想・発表）の5点を設定した。

①について、生徒アンケートでは94.2%の生徒が肯定的に回答している。②について、生徒アンケートでは94.2%の生徒が肯定的に回答している。③についても98.9%の生徒が肯定的に回答している。④について、生徒アンケートでは93.0%の生徒が肯定的に回答している。⑤について、体験活動は、総合的な学習の時間を中心に実施され、1年生では『「郷土、九度山を知る」～地域から学ぶ～』をテーマに地域学習を実施した。学習を通して「地域社会と郷土の文化や歴史について調べ、見聞し視野を広げる」ことや「地域社会の一員としての自覚をもつ」ことができた。2年生では『「働くということを体験しよう」～地域で体験する～』をテーマに職場体験学習を実施した。学習を通して「地域の職場について調べ、自ら職場を体験することにより、働くことの大切さを知る」ことができた。3年生では『「地域の福祉について考えよう」～地域に根づかせる～』をテーマに福祉ボランティア体験を実施した。学習を通して「地域の福祉行政の取組について理解を図り、生徒が自分でできる地域貢献について考える」ことができた。なお、1年生と2年生は自分たちの学習をまとめ、学習発表会で発表することができた。

学校行事では、修学旅行や校外学習はコロナを契機に、従来の見学やテーマパークでの遊びを中心としたものから、体験を通じた学びを中心としたものに変えてきた。また、運動会や校内球技大会を実行委員や専門委員となった生徒が中心となり主体的に運営させたり、あいさつ運動や清掃活動など生徒の主体性を尊重させたりすることで自立への取り組みを行ってきた。

進路指導では、キャリア教育指導計画を作成し、1年生では将来の夢や進路、職業について、2年生では上級学校や職場体験学習、3年生では具体的な進路選択について学習している。入学時より自分の将来を見通して、自分の生き方や進路に関心をも

たせること、また、目標実現のため生徒一人一人の個性や特性を考え、自らが進路を選択できるようになることに重点をおき、学級活動や個人懇談で指導した。また、キャリアパスポートを有効に活用したいと考える。	
5	その他
(1)	「生徒指導の徹底」について
<p>生徒との信頼関係を大切にしながら、問題行動の早期発見と即時対応を心がけるとともに、全教職員が共通理解し、担任や生徒指導部まかせにならないよう留意しつつ、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、九度山町教育委員会や町福祉課との連携を心がけた。生徒自らが善悪の判断を正しくできるよう学級活動や全校集会等で指導したことにより、多くの生徒は学習や部活動に熱心に取り組み、真面目に学校生活を送ることができた。これからも、生徒の自立の精神と正しく判断できる力を育む指導を大切にしなければならないと考える。</p> <p>大きな課題として、生徒アンケートでは「学校へ行くのが楽しい」と回答している生徒が9割を超える反面、「あまりそう思わない」生徒の存在や、学年の途中から不登校や別室登校になってしまう生徒がいることである。各担任と養護教諭やスクールソーシャルワーカー（さらに町不登校生徒支援員や町家庭教育支援サポートチーム「きらら」支援員の場合もある）による家庭訪問や、本人・保護者とスクールカウンセラーとの教育相談を機会あるごとに実施した。また、管理職と関係教員等によるケース会議を定期的にも実施した。さらに、職員会議（月1回）でも、情報の共有と取り組みの意思統一を密に行った。しかし、生徒の言う「学校に行けない理由」を解決しても登校できることはなく、「行けない理由」探しだけでは根本的な解決にはならないケースが多い。本人の意志で学校に行かないケースもあり、学校だけでは解決できないことも多く、関係機関との連携が不可欠である。</p>	
(2)	「特別支援教育の充実」について
<p>本年度本校には特別支援学級の知的学級に、2学年にわたり3名の生徒が在籍している。生徒の個性を理解し、授業カリキュラムも個人別に作成するなど落ち着いて学習できる環境づくりを心がけた。また、普通学級にも特別な支援を必要とする生徒が在籍している。これらの生徒にも個別最適な学びができるよう数学で習熟度別に授業を実施したり、補習を行ったりした。今後も全教職員の共通理解のもと、引き続き特別支援教育についての研修を深め、具体的な事例を交えながら行い、生徒個々の教育的ニーズに応えられる支援体制を図っていきたい。</p>	
(3)	「安全教育・保健管理」について
保健体育の授業や保健だより等を通し、健康増進と健康管理、体力向上のための指	

導を行った。特に、新型コロナウイルス感染予防については、昨年度までと同様に、手洗い・うがいの奨励、換気の徹底に取り組んだ。また、インフルエンザや食中毒等については、保健だより・学年だよりを通して予防の方法等について周知し、学級等でも指導の徹底を図った。

交通安全については、PTA役員の協力も得ながら毎月1日と15日の登校指導を行った。本年度も下校時の交通安全等について地域の方や保護者の方から注意やアドバイスをいただくこともあり、その都度、機を逃さず指導した。

防災については、非常事態でも自ら判断し行動できる生徒を育てるために、火災発生・地震発生を想定した避難訓練を行った。生徒アンケートでは「災害時に自分がすべき行動」について、ほとんどの生徒が理解していると回答している。今後も安全管理について教員が十分把握し、訓練や生徒への学習を実施していきたいと考える。

(4) 「信頼される学校づくり」について

次の表は令和2年度から令和5年度までの保護者アンケートについて、全ての設問について、肯定的な回答（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）と否定的な回答（「あまりそう思わない」＋「全くそう思わない」）、「分からない」と回答した割合の平均を表したものである。

保護者(%)	肯定的	否定的	分からない
R2	68.1	30.4	1.4
R3	74.4	24.4	1.3
R4	69.7	28.9	1.3
R5	70.2	28.6	1.2

今年度も昨年度までとあまり変わらない結果であった。「わからない」と回答した割合が少しずつ減少傾向にあるものの、否定的な回答の割合は高い水準のままである。今後も学校の教育活動について丁寧に説明し、学校評価アンケート等でいただいた意見や疑問にきっちり応えていくことで、学校や教員が信頼される学校づくりが大切であると思う。